本書の構成は以下の通りです。まず第 1 章では，音声指導について扱います。音声は日本語の授業であまり扱われることのない項目ですが，英語やフランス語などでは，音声は重要な指導項目です。この章では，なぜ音声指導が重要なのかについて考え，日本語の子音，母音，リズム，アクセント，イントネーションについて，英語と対比しながら説明します。そして，学習者にとって困難な音声的特徴について言及し，これらの音声の指導法について紹介していきます。

第 2 章では，語彙指導について説明します。語彙は自宅で覚えればよいものと考えられてきましたが，近年言語習得における語彙力の重要性が認識されてきました。また，コミュニケーションに必要な語彙知識は字形，辞書的な意味，発音だけではなく，共起関係，用法などを含む複雑な知識であることも分かっています。そこで，本章では，まず語彙とは何か，そして語彙の構成要素とは何かについて考えます。また，学習者が言語を円滑に運用するために必要な語彙量や語彙の習得過程についてまとめます。更に，日本語の語彙の特徴や漢字力と語彙力の関係について述べ，語彙力を増やすための漢字の指導と語彙指導について紹介します。

第 3 章では，読解指導について述べます。日本語の表記の複雑さもあり，読解については多くの研究があります。けれども，人が何をどのような目的で読むのか，目的によって読み方がどう変わるのか，読みの過程で何が起こるのかといったことについての体系的な記述は不足しているように思われます。そこで，この章では，読みの目的，流暢な読みとそうでない読みの違い，読みの過程について説明し，読解力を獲得するために必要な技能について述べます。更に日本語の読解における問題点や留意点についてまとめ，教室内外でどのように読解を教えるかについて紹介します。

第 4 章は，聴解指導についてまとめます。まず，音声言語の特徴をふまえ，聴解と読解の基本的な違いについて説明します。さらに，聴解過程と流暢な聴解のために必要な技能についてまとめます。そのうえで，聞き取りのための基礎的能力を伸ばす方法について紹介していきます。

第 5 章から第 8 章は，本書の続編で扱います。第 5 章では文法指導に関する 2 つのアプローチや，文法習得を難しくする要因，そして，文法

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

習得を促す指導について考えます。第 6 章では会話指導について検討します。この章では，口頭産出が必要とされる様々な場面と目的について紹介し，対話と独話，交渉会話と交流会話の談話の特徴，日本語におけるターンテイキングの規則などについてまとめます。そして，文法を教えるための会話ではなく，会話をするための会話の指導の方法について紹介します。第 7 章は作文指導について説明します。ここでいう作文とは，文章を書くことではなく，コミュニケーションをするために行うすべての書く活動です。そこで，書く目的，書き言葉の特徴，書式について説明します。さらに，文章を書く場合を想定し，その産出過程，上手な書き手とそうではない書き手の違いについて述べます。さらに，文章産出過程における学習者の問題について検討し，効果的な作文指導の在り方について紹介していきます。

第 8 章では複数の技能や知識を組み合わせて使う総合学習について検討します。実際のコミュニケーションでは，ただ「聞く」「話す」だけではなく「聞いて話す」「聞きながら書く」「読みながら書く」というように複数の技能を使うこともよくあります。そこで，本章では，様々な知識や技能を複合的に使う指導について，近年のアプローチをもとに紹介します。

本書では，理論と実践を組み合わせることで，何を指導すべきか，それはどうしてなのか，指導するのであれば，どのようにすることが学習者の言語習得を促すのかについて考えていきます。日本語の教科書はあくまでも素材であり，多様な学習者すべてに対応できる教科書というものは存在しません。いかに効果的な指導ができるかは，自分の学生について最もよく知っている現場の教師にかかっています。教科書に依存するのではなく，学習者の学習過程や言語習得上の問題点を理解することがまず大切です。そして，授業で行うひとつひとつの活動の役割や意味を考え，授業をデザインすることで，より高い効果を上げられるのではないかと思います。本書がそのための参考資料として，学習者を支援する一助となることを願っています。

2022 年　8 月

畑佐由紀子

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

目　　次

まえがき

第 1 章　音声指導 …… 1

1.　はじめに ―― 1
2.　分節音（単音 segments）と超分節音（suprasegments）― 2
3.　分節音 ―― 3
3.1.　子音　3
3.2.　母音　7
3.3.　音と音素　8
3.4.　母音の無声化　12
4.　超分節音 ―― 13
4.1.　モーラと音節　13
4.2.　言語のリズム　16
4.3.　日本語のリズムとフット　18
4.4.　アクセント　19
4.4.1.　アクセントの機能と種類　19
4.4.2.　日本語のアクセント　20
4.4.2.1.　名詞のアクセント　20
4.4.2.2.　形容動詞のアクセント　22
4.4.2.3.　動詞のアクセント　23
4.4.2.4.　形容詞のアクセント　24
4.4.2.5.　外来語のアクセント　25
4.4.2.6.　複合語のアクセント　26
4.5.　イントネーション　27
4.5.1.　イントネーションの役割　27

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

4.5.2.　基本的なイントネーション　31
4.5.3.　統語構造を示すイントネーション　32
4.5.4.　フォーカスを示すイントネーション　32
4.5.5.　文末のイントネーション　33
5.　発音習得の問題 34
6.　音声の指導 39
6.1.　習熟度と音声指導　39
6.2.　分節音の指導　42
6.2.1.　母音　42
6.2.2.　子音　45
6.2.2.1.　有声音と無声音　46
6.2.2.2.　ザ行の子音　48
6.2.2.3.　ツとチュ・ス　50
6.2.2.4.　ダ・ラ・ナ　51
6.2.2.5.　タスクを活用した練習　52
6.3.　リズムの練習　54
6.4.　アクセントの練習　59
6.5.　イントネーションの練習　65
6.6.　シャドーイング　71

第 2 章　語彙指導 75

1.　はじめに 75
2.　形態素，語と語彙 76
3.　語彙数と語彙頻度 78
3.1.　ワードファミリーとレンマ　78
3.2.　1 年間に習得する平均語彙数　80
3.3.　語彙頻度とカバー率　80
4.　語彙知識 83
5.　L2 学習者の心内辞書 88

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

6.　定式表現 ―― 90
7.　日本語の語彙の特徴 ―― 92
7.1.　和語の特徴　94
7.2.　漢語の特徴　96
7.3.　外来語の特徴　97
7.4.　混種語　98
7.5.　接辞と語構成　99
8.　L2 語彙習得に影響する要因 ―― 101
9.　語彙の指導 ―― 105
9.1.　漢字の指導　105
9.1.1.　予備段階　106
9.1.2.　漢字指導の段階　109
9.2.　指導項目　112
9.3.　語彙学習のアプローチ　114
9.3.1.　付随的語彙学習　115
9.3.1.1.　未知語類推ストラテジー　118
9.3.1.2.　辞書・インターネット使用ストラテジー　119
9.3.1.3.　ノート・テイキング・ストラテジー　120
9.3.2.　意図的語彙学習　121

第 3 章　読解指導 …… 129

1.　はじめに ―― 129
2.　読むということ ―― 130
3.　流暢な読みと流暢でない読み ―― 133
3.1.　流暢な読みの特徴　134
3.2.　流暢でない読みの特徴　137
4.　読みの過程 ―― 138
4.1.　下位レベルの処理過程　138

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

4.2.　上位レベルの処理過程　140
4.3.　一般的な認知的処理過程　141
5.　読解ストラテジー　143
6.　テキスト理解のモデル　144
6.1.　ボトムアップ処理　144
6.2.　トップダウン処理　145
6.3.　インターアクティブ処理　147
6.4.　構成・結合モデル（Construction-Integration Model）　147
7.　L2 日本語学習者の読解の問題　149
7.1.　初級学習者の問題　150
7.2.　中級学習者の問題　154
7.3.　上級学習者の問題　158
8.　読解の指導　160
8.1.　テキストの選び方　161
8.2.　教室外活動：多読　163
8.3.　読解ストラテジーの指導　169
8.4.　4 技能を用いる指導とペア・グループワークの活用　176
8.5.　習熟度別の指導　177
8.5.1.　初級の読解指導　177
8.5.2.　中級からの読解指導　181
8.5.2.1.　目的別の読解指導　182
8.5.2.2.　まとまった文章の読解指導　183
8.5.2.2.1.　読解前作業　183
8.5.2.2.2.　読解本作業　185
8.5.2.2.3.　読解後作業　188

第 4 章　聴解指導　193

1.　はじめに　193
2.　聞くことと読むこと　194

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

3.　リスニングの過程 200
3.1.　ヒヤリングとリスニングの違い　200
3.2.　下位レベルの処理　202
3.2.1.　語境界の切り出しと語彙認知　203
3.2.2.　構文解析　205
3.3.　上位レベルの処理　208
4.　聴解能力の習得 214
4.1.　L1 習得　214
4.2.　L2 習得　216
5.　聴解の指導 219
5.1.　聴解能力の習得に必要なスキル　219
5.2.　聴解教材・発話資料の選び方　221
5.2.1.　難易度の調整　223
5.2.2.　生教材（本物）の使用　225
5.3.　聴解指導における留意点　226
5.4.　聴解指導の種類と指導法　230
5.4.1.　集中的リスニング　231
5.4.1.1.　間違い探しと復唱誘導　231
5.4.1.2.　ディクテーション　232
5.4.1.3.　高変動音素訓練（High variability phonetic training, HVPT）　235
5.4.2.　選択的リスニング　237
5.4.3.　対話的リスニング　240
5.4.4.　多聴　244
5.4.5.　リスニング・ストラテジーの指導　246

教材リスト…… 253
参考文献…… 255

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第 1 章

音声指導

1. はじめに

外国人の発話で母語話者が一番初めに注意を向けるのはおそらく発音だと思います。外国語なまりは上級になっても残ることが多いため，発音を聞きさえすれば，その人が外国人であることは母語話者には容易に分かることが多いです。外国語なまりは，発話が正確に理解され，母語話者に悪い印象を与えなければ，大きな問題にはなりませんが，耳障りであるとか，気が荒いといった本人の性格とは異なる好ましくない印象を与えてしまう場合は，母語話者に誤解される原因になりかねません。また，単語が聞き分けにくいといった発音上の問題がある場合，どれだけ文法的に正しく話していても，母語話者に正しく発話意図が通じませんし（土岐, 1980），母語話者からも日本語能力が低いと判断されてしまいます（Ensz, 1982; Nelson, Signorella, & Botti, 2016; 東間, 1991）。そのため，発音が悪いことがコンプレックスになって，話すことに対する苦手意識を持ってしまう可能性もあります。

その一方で，音声能力の獲得は，聞き取りや発音能力の向上に役立つだけではなく，語彙知識の獲得にも役立ちます。音が正しく聞こえれば，聴解や会話を通して語彙を獲得することができますが，音が聞き分けられないと，聞き取りから語彙，特に話し言葉の獲得が難しくなります。例えば，日本語には /v/ という音は存在しませんから，/b/ と /v/ はどちらも /b/ と認識されます。一方，英語では /v/ と /b/ は意味の違いを表し，vacation の短縮形 vac は「休暇」，back は「背中」という意味になります。しかし，会話の最中にこのような語に出合うと，誤解をしたり，後で辞書

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第 2 章

語彙指導

1. はじめに

語彙は，コミュニケーションを成立させるために，最も基礎的な言語知識です。なぜなら，語彙，特に，名詞，動詞，形容詞といった自立語は，人が何らかのメッセージを伝えたり，理解したりするための基本的な意味を表す言語要素だからです。そのため，単語を間違えると，意味の伝達や理解に大きな負の影響を及ぼします。単語を知らなければ，最低限のメッセージを伝えることも，簡単なメッセージを理解することもできませんし，語彙力は，文法知識よりも，読解や聴解の成功に関与することが多くの言語で明らかになっています。また，語彙の間違いは会話で聞き手の注意をひきやすく，コミュニケーションの断絶を起こしやすいことも分かっています。このように，語彙力は，様々なコミュニケーションの場で重要な役割を果たすのです。

けれども，日本語教育では，授業で教えるよりも，家で覚えてくる項目として扱われることが多いようです。語彙は数が多く家で覚えられるので，授業では扱わなくてもいい，語彙より文法や会話に授業時間を使ったほうがいいといった考えがあるからかもしれません。しかし，先行研究では，語彙知識は非常に複雑で運用が難しい言語項目であることや語彙の獲得には時間がかかることが指摘されており，積極的に指導すべきとされています。

そこで，本章では，語彙知識に関する基本的な定義を紹介し，コミュニケーションに必要な語彙数，語彙知識の構成要素とその習得過程について説明します。そのうえで，日本語の語彙の特徴や漢字力と語彙力の関係に

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第 3 章

読解指導

1. はじめに

言語の基本は話し言葉であり，書き言葉ではないと言われます。なぜなら，自然言語に口頭言語があって文字がないものは存在しますが，文字があって口頭言語がないものは，ラテン語など口頭言語が死語になったものだけだからです。話し言葉は，その言語が使われる環境にいれば，勉強しなくても習得できますが，書き言葉は，母語話者といえども学習しなければ習得できません。2020 年 9 月のユネスコの調査によると，2019 年の世界の識字率は 86.48 %で，10 億 7,428 万人（15 歳以上）が文盲だと報告されています（UNESCO, 2021）。

日本では 9 年間の国語教育を通して，読解力と文章産出能力を育成しており，その目的は，教科学習の基礎を養うだけではなく，理解力・表現力を育成することにあります。そのため，文字教育のほか，詩や小説などの文学作品や，説明文や意見文などまとまった文章を読ませることが多いです。

これに対して，L2 学習者の場合，学習対象となる読み物は多岐にわたります。例えば，銀行口座を開いたり，電車の時刻表を見たり，インターネットで買い物をしたりする際など，日々の生活で様々な物を読みます。母語話者がこれらの資料の読み方を学校で勉強することはありません。しかし，L2 学習者にとっては，これらは日本で生活していくために必要な学習対象となります。また，日本研究をする学習者は，習熟度が低くても，難解な原文を研究のために読まなければならないこともあります。このように，L2 学習者に対する読解教育の目的は，学習者のニーズに左右

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第 4 章

聴解指導

1. はじめに

L1 でも L2 でも，聞いて分かるということは運用能力を身につけるために，重要な役割を持ちます。例えば，乳児は生まれてから 9 ヶ月から 1 年 6 ヶ月までは沈黙期にあり，言葉を話すことはできませんが，生後 1 年ぐらいまでに母語の音素の弁別ができるようになります。そして，**音韻知覚能力**の発達に伴い，インプットから母語の単語を理解するようになり，発語が始まり，急激に言語が発達します。文法的な間違いはあるものの，2 歳ころには大人との会話ができるようになり，4 歳ころにはほとんどの文法形態素を使うようになります。つまり，母語の場合，聞く能力は話す能力に先行して発達すると考えられます。

L2 学習者にとっても，聞いて理解することは，言語を獲得するために重要な基礎的スキルでもあります。ただ，母語と違い，L2 学習者の場合，沈黙期がある人もない人もいますし，沈黙期があったとしてもその期間は様々です。例えば，教室で日本語を学習する人は，初めから話すことを要求され，沈黙期がありません。また，日本語を全く話せない状態で日本に来て，周りに日本人しかいないという場合，積極的に話そうとする人には沈黙期がありません。一方，しばらく話せない期間があって，徐々に話すようになる人には一定期間の沈黙期があります。沈黙期が長い場合，聞けるけれども話せないといういわゆる受容的バイリンガルになることもあります。このように，L2 の場合，聞くことは，必ずしも話すことに先行するわけではなく，また，聞けるようになれば必ず話せるようになるというわけではない点で母語習得とは異なります。

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers